

---

メシスラス・ゴルベール『線の倫理』における芸術理論に関する一考察  
—アンリ・マティス、パブロ・ピカソの芸術理論的支柱としての役割を中心に

吉川貴子(早稲田大学)

---

本発表は19世紀末から20世紀初頭にかけてパリで活動した美術批評家メシスラス・ゴルベール(1869-1907)の芸術理論の研究の一環として、アンリ・マティス、パブロ・ピカソの芸術理論への寄与について考察する。

亡命ユダヤ系ポーランド人のゴルベールは世紀転換期において詩の執筆、政治、文学、芸術など幅広い分野にわたって旺盛な執筆活動を行ったにもかかわらず、その早すぎる死により現在ではほぼ忘れ去られた存在となっている。近年ようやく生前の活動や思想に関する研究が端緒についたばかりであるが、社会政治学的、文学史的観点に基づく詩人や政治活動家としてのゴルベールを研究対象とするものが大半を占め、当時のアートシーンとの緊密な関係性といった視点に根ざした美術批評家としてのゴルベールの側面を十分に分析しているとは言いがたい。

そこで本発表ではマティス、ピカソらの研究書においてその関係性がわずかに指摘されるのみに留まっている彼の芸術理論について、主要著作である『線の倫理』(*La morale des lignes*)を考察の対象としながら、いかなる点で彼の死後社会的に認知されるようになる芸術家の理論的支柱となりえたのかを指摘する。

『線の倫理』は同時期に刊行されたアンドレ・ルーヴェールのデッサン集『崇高な骨組み』(*Carcasses divines*)の註釈として刊行されたものであり、ゴルベールの著作において同時代芸術を集中的に論じた唯一の批評書である。著作内では「線の倫理」「変形」「笑い」「魂の幾何学」「勝利の線」「精神性」「モノグラフィ」「結論」の八章構成で同時代の心理学、精神生理学などの知識を散りばめながらルーヴェールのデッサンについて論じている。その芸術理論の影響源には明らかにシャルル・アンリの線の運動が感情を表す理論や、ジョン・ラスキンの美と道徳的価値を結びつける芸術批評などが見出せ、19世紀の美学からの影響を多分に受けたものであった。ゴルベールの独自性はこうした芸術理論に立脚しながら、芸術とは諸現象に通底する規則に従いながら有機的な力を「使用する」ことを可能とする、ただ一つの抽象化のプロセスであると結論付けている点である。この抽象化のプロセスとして、ゴルベールは極度にデフォルメされたルーヴェールの人体表現を積極的に擁護することになったのである。

本発表ではこの結論への論理的展開を読み解きながら、ギヨーム・アポリネールやロジャー・フライなどに先立ってフォーマリズム的観点で同時代芸術を擁護したゴルベールの芸術理論の特異性を明らかにする。特にアポリネールの芸術理論との類似性を具体的に挙げ、更にガートルード・スタインのサロンにおいて交流を深めたゴルベールとアポリネールの関係性を指摘しながら、マティス、ピカソの芸術様式の社会的認知に寄与した経緯を明らかにする。